

令和元年度 山手小学校【学校評価資料】

学校経営目標		自己評価(中間)		自己評価(最終)		学校関係者評価
具体的計画		達成状況	評価	達成状況(矢印は比較)	評価	自己評価の適切さ
(心豊かな児童の育成)	①「だれもが行きたくなる学校づくり」の実践や「特別な教科 道徳」の授業を通して、思いやりの心や自己有用感を育成し、安心して学校生活を送れるようにする。 ②すきだ山手小学校運動を通して、礼儀正しい児童を育成する。	・相手方を思いやった言動がみられるという回答が90％以上で、学校が楽しいという回答が85％以上である。(児童・保護者・教職員アンケート) 楽しい 児童：89％ 保護者：92％ 教職員：100％	思いやり 児童：94％ 保護者：88％ 教職員：97％ A A 人権 児童：75％ 保護者：68％	・友達に優しくされていると感じられるような、「きりりカード」の取組をもっと活発に行い、児童同士が大事にされていることを認識できるようにする。 思いやり 児童：91％ 保護者：90％ 教職員：97％ 楽しい 児童：90％ 保護者：91％ 教職員：100％	A A C A	「思いやりの心」については、学校生活を通して子どもに育っており、日常生活やピアサポート場面で基準が達成されていると見受けられることから、一定の成果があったとして自己評価は妥当である。今後も、「きりりカード」や「良いこと見つけ」といった取組を通して、子ども達の自己肯定感を育成し、心の安定を図ってもらいたい。「学校が楽しい」といった点に対して教職員の評価が高いことは良い点であるが、全ての児童が「楽しい」と回答していないことについて教職員全体で検証を行ってほしい。例えば、児童が学校に登校する際に抱える不安等を保護者が感じていることもあるので、保護者と連携しながら意識した対応をしてほしい。「学校が楽しい」と回答していない児童・保護者の「サイン」や「気づき」に十分に配慮して100%を目指してほしい。学校のラブラルについては、教職員と保護者が一丸となって考え、時には子ども達自身で解決する力を身につけるように促すことを通して、子どもたちがより人の気持ちを理解できるようになると期待する。
	・友達が自分に優しくしてくれるという回答が83%以上である。(保護者アンケート) ・学校はいじめの対策等、人権に配慮した対応をしているという回答が83%以上である。(児童・保護者アンケート)	優しい 保護者：93％ 人権 児童：75％ 保護者：68％	A C	・教職員の多くは、児童の行動をよく観察して対応している。しかし、それが保護者や地域の方に伝わっていない。そこで、道徳やSELの授業を通して、相手の気持ちの理解をする学習は継続して行う。また、保護者や地域の方に通信やホームページで児童の様子を伝えたり、学校の取組に協力を仰いだりする。 優しい 保護者：94％ 人権 児童：76％ 保護者：65％	A C	自己評価は妥当である。しかし、「人権に配慮した対応」について、児童と保護者の回答が低いことに対しては、「何が人権に配慮した対応なのか」といったことが伝わっていない可能性があるので、「人権に配慮した対応とは何か」を教職員全体で共通認識を図ってほしい。特に、保護者は児童を通した情報に依存している場合があり、学校での活動・対応が正しく組み切れていない部分もあるので、教職員と保護者が家庭訪問を通して連絡をとりあってほしい。また、保護者による場合は、学校から具体的な対応を受けていない場合、回答できない場合があったので、アンケート項目の改善を図ってほしい。
	・挨拶や返事がよくできる。履き物をそろえる。黙って考えて掃除ができるという回答がそれぞれ80%以上である。(児童・保護者・教職員アンケート)	挨拶 児童：84％ 保護者：72％ 教職員：91％ 履き物 児童：88％ 保護者：51％ 教職員：90％ 掃除 児童：88％ 保護者：61％ 教職員：87％	B B B	・挨拶に関しては、週目標の設定や挨拶運動の取組を継続している。学校の中では、ある程度挨拶ができるようになっているものの、地域等ではなかなか挨拶ができない現状が見える。そのため、挨拶の大切なさや気持ち良さがかかるような指導を行い、繰り返し練習することや、保護者が児童の学校生活での掃除の様子を見ていないことが要因として考えられる。今後、児童が進んで家庭内で掃除をするなど、家庭生活に結びつく取組を考えていきたい。 挨拶 児童：84％ 保護者：71％ 教職員：82％ 履き物 児童：89％ 保護者：49％ 教職員：87％ 掃除 児童：89％ 保護者：63％ 教職員：87％	B B B	「すきだ山手小学校」については、挨拶、返事、履物、掃除等、生活習慣や人間関係に関する重要な事項が盛り込まれており、児童・教職員の回答からは概ね基準が達成されていることから、自己評価は妥当である。一方で、「履き物」や「掃除」の保護者の回答が低いことは、実態として行われていないのか、学校での取組が保護者に浸透していないのかを把握することが大切である。児童が「できていない」と認識していても、保護者から見ると物足りない場合は、達成に向けて学校と保護者が連携する取組をさらに進めてほしい。児童や保護者にとって学校が特別な場ではなく、「学校でも家でも」同様の行動ができるという意識が大切である。 「心プロジェクト」では、評価の客観的指標としては行動面を基準として評価されがらだが、「心」という情緒や認知について、「なぜその行動するのか」という根本を児童に伝えようとする学校の姿勢を継続して行ってもらいたい。何のために「履き物」をそろえるのか「挨拶をするのか」について子どもが理解することにより、保護者も気づくことができるのではないかと、心の教育は、学校教育と家庭教育での習慣が大きい影響することを考慮すると、保護者の協力を得ながら、家庭や地域でのつながりを意識し、児童の様子を情報共有することも大切である。
	③岡山型学習指導のスタンダードや算数の授業づくりははじめの一步を基に授業改善を図り、基礎的な力を身につけ、考えたことを様々な方法で表現できる児童の育成を目指して分かる授業を実践する。 ④どの子にも分かりやすい授業づくりを意識するとともに、個別に支援を要する児童について、共通理解の場を設け、全職員で全児童を支援できるようにする。	・「『岡山型学習指導のスタンダード』や『算数の授業づくりははじめの一步』を基にユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善に取り組んだ」「『めあて』『ふりかえり』を意識した授業を行った」という回答がそれぞれ90%以上である。(教職員アンケート)	スタンダード 教職員：93％ めあて 教職員：96％	・ICT機器を授業の中で効果的に活用する。 ・学習の流れを示す。 ・サンプルで構造的な板書を心掛ける。 ・授業のめあてを達成するために必要なWSを有効に活用していく。 ・指示は短く簡潔にする。曖昧な表現ではなく、具体的な表現に置き換える。(視覚的な提示も含めて) ・作業など時間の区切りが分かるようにする。	スタンダード 教職員：100％ めあて 教職員：100％	全職員で全児童を支援する取組がなれているので、自己評価は妥当である。今後も個々の児童それぞれにニーズがあるということ意識して、児童理解に基づいた授業計画・実践・改善を行ってほしい。児童の基礎学力の向上は教師の指導の努力によるものである。これから校内研修等を通して、「良い実践」を共有してほしい。「岡山型学習スタンダード」が定着していることは本校の取組の成果であるため、今後も継続してほしい。一方で、「スタンダード」の内容だけに留まらず、発達段階や児童の状況に合わせた授業の工夫も、今まで以上に積極的に行う時期にきている。 「学びプロジェクト」は、年々取組が良い方向へ向いている。今後は、「評価⇒どう変わっていくか」を大切にもらいたい。また、児童に対して、途中であきらめたりせずに「当たり前」にする姿勢を引き続き養ってほしい。
(二確かな学びプロジェクト)	・「自分の考えをもち、話したり書いたりすることができるようにになっている」という回答が80%以上である。(児童・教職員アンケート)	児童：88％ 教職員：89％	A	・ミニ作文など書く活動を計画的に学習に取り入れ、指導・評価を行う。児童が自分の伸びを実感できるよう、ファイルに綴じる。 ・自分の考えを発表させる時、できるだけそのように考えた理由を言わせるようにする。教師が説明するのではなく、児童に説明させる。	児童：86％ 教職員：100％	自己評価は妥当である。自分の考えを発表させる時に、考えた理由について述べることは、児童自身の「つまずき」を知る機会になり、有効な教育方法である。加えて、学年の発達に合わせた指導を今後も心掛けてほしい。発達段階によっては、自分の意見を発表することが難しい場合や自己の考えや認識を表現できない場合もある。ミニ作文等の取組を蓄積することで、児童自身が自らの成長を実感できるようになることが取組でほしい。
	・家庭学習に(1. 2年20分以上、3. 4年40分以上、5. 6年60分以上)取り組んでいる。(児童・教職員アンケート)	児童：79％ 教職員：90％	A	・単元の途中で、より細かな振り返りを行い、確かな定着を図る。 ・宿題の出し方を児童の実態に合わせて工夫する。	児童：80％ 教職員：91％	自己評価は妥当である。家庭学習や宿題については、児童の「学び」への意欲を高める取組を継続して行っている。特に、自主的に学ぶという意欲を持てるような宿題を学校全体で考えてほしい。児童が学習習慣を身につけることが、今後の児童の学力につながる。例えば、児童の考えを整理したり、表現をする上では日記の宿題が効果的ではないだろうか。教職員全体で児童の意欲を引き出す取組を検討してほしい。
	・国語科・算数科の単元テストにおいて、正答率が80%以上である。(教職員アンケート) ・学んだことがよく分かる。(児童アンケート)	教職員：90％ 児童：88％	A A	・単元の途中で、より細かな振り返りを行い、確かな定着を図る。 ・宿題の出し方を工夫する。	教職員：95％ 児童：90％	自己評価は妥当である。国語や算数の単元テストの結果等、基礎学力の向上が図られていることは教職員の努力による。引き続き取組を行い、算数の全国学力テストを平均点以上にしてほしい。学習の振り返りを行うことで、児童自身にとっても何を学んでいるのかが明確になっているため、素晴らしい取組である。
	・「最後まであきらめずに問題を解決する力を育てるための工夫として、学習課題の設定や評価の仕方の工夫を行った」という回答が90%以上である。(教職員アンケート) また、「難しい問題でもあきらめずに考えた」という回答が80%以上である。(児童アンケート)	工夫 教職員：92％ あきらめない 児童：94％	A A	・学習の中で出てきた自分の考えを残す指導を全校で行う。 ・自分の考えを基本的には消しゴムで消さないようにし、努力した過程を認める。	工夫 教職員：96％ あきらめない 児童：88％	自己評価は妥当である。学習の中で自分の考えを残す指導は、児童の自己肯定感を高めると同時に、児童が自らの考えを整理・表現する力につながる。児童自身が何をどこまで考えることができたのか、またどこでつまづいてしまったのかを認識することが次の問題を解くことにつながる。時代とともに子ども達の能力に格差が生まれる中で、わかりやすい課題を工夫していることは必ず効果を生むものだと思う。ペア学習等を通して、子ども同士が助け合うことで、自分の課題に向き合うことができるため、引き続き活動を続けてほしい。 「頑張って最後まで解こう」という気持ちを継続して児童が持てるように、今後も過程を認める活動を続け、問題を解けた時の嬉しさや喜びを共感し、勉強する楽しさを醸成してほしい。「わかる」、「わかった」は児童の達成感と満足感につながる。
(体力づくりと元健康・安全教育の充実)	⑤休み時間や教科体育を通してたくさん運動しようと思えるような取組や児童がめあてをもつて運動に取り組むことができる指導を行う。	児童：84％ 教職員：100％	A	・学習最後の振り返り時間をしっかりとって、体を動かして活動したことを自覚できるようにする。	児童：92％ 教職員：100％	児童が運動に取り組むことができるので自己評価は妥当である。取組に興味を持つかどうかは「楽しさ」に左右される面もあるため、児童全員が運動が楽しいと実感できるよう現在の取組を続けてもらいたい。運動量の2倍化は、児童の今後の身体への成長にも関わってくるため、運動への積極的な意識づけを行ってほしい。・J1J2J15J18J12J14J12J16
	⑥基本的な生活習慣(早寝・早起き・朝ごはん)の定着をめざし、家庭と連携をしながらメディアの適切な利用の意識を向上させる取組を行う。	児童：75％ 教職員：96％	A	・6. 7月は暑さのため、外遊びを奨励しにくかった。2学期は過ごしやすくなるので、担任を中心に声を掛けるようにする。 ・6. 7月は水泳学習の関係で夏休み中は着替える等になることが多かったが、2学期は外に出る時間的な余裕も出てくるので、外遊びを奨励する。	児童：86％ 教職員：97％	自己評価は妥当である。全体的に外で遊ぶ子どもは少なく、体の動かし方も知らない場合もあるため、体育の授業を通じて、教員から技術的な指導も行っている。また、夏休み明けについては、授業の中にも教室で次の授業の準備をしたい場合もあるため、子どものニーズに合わせてよいのではないかと、来年度からの目標項目に入れるのかどうかは教職員全体で検討してほしい。
	・「メディアコントロール週間では、家族と決めた自分のめあてを守ろうとしている」という回答が80%以上である。(児童アンケート) ・早寝・早起きができるように声を掛けたり、環境を整えたりしている。(保護者アンケート)	児童：84％ 保護者：89％ 児童：70％	B B	・現在の取組を続ける。	児童：85％ 保護者：87％ 児童：78％	基本的な生活習慣の定着には家庭との連携が不可欠である。保護だよりの呼びかけ等の様々な取組を行っていることから自己評価は妥当である。メディアコントロールや「早寝早起き」については、家庭間でも差が大きいことから保護者の手本が必要である。学校は保護者に対して最新の情報を伝えることを意識してほしい。特に早寝・早起き・朝ごはんは家庭での取組であり、各家庭がどのように改善できるのかを考えることが必要となる。メディアコントロール週間は有効活用されているが、毎回内容が同じではなく、新しい項目を入れるか、めあてを自分で決めるのではなく、選択にするなどの工夫をするなどで家庭を巻き込んだ取組になるのではないだろうか。教職員全体で検討してほしい。
	・「メディアコントロール週間では、メディア利用や睡眠時間について話題にしたし、声を掛けたりしている」という回答が80%以上である。(保護者・教職員アンケート)	保護者：84％ 教職員：91％	A	・引き続き現在の取組を続ける。 ・職員アンケートの項目15に「担任のみ回答」と明記する。	保護者：81％ 教職員：100％	自己評価は妥当である。メディアコントロールについては、児童・保護者が話題にしたし、声をかけていることから自己評価は妥当である。担任はメディア利用や睡眠時間について、常に学級懇談等で話題にあげ、児童にも折に触れ呼びかけていく。
(四開かれた学校づくり)	⑦各種通信やホームページ等を通して学校行事の様子や子育てに役立つ情報を発信し、本校の教育活動を多くの人に知らせる。 ⑧学校・家庭・地域で連携して児童の健やかな成長を目指すために、ボランティアによる学習支援の機会を増やし、交流を深める。	・「ホームページや学校便り、学年便り等の各種通信により、学校から発信した情報が役に立った」という回答が、80%以上である。(保護者アンケート) ・先生は、連絡帳、電話連絡、学年便り、ホームページ等の各種通信により、保護者との連絡を密に取ったり、役立つ情報を発信したりできた。(教職員アンケート) ・「学習効果や地域交流を意識して、学校支援ボランティアの有効な活用に努めた」という回答が80%以上。(教員アンケート) ・地域ボランティアの方が、学校へ来て学習を支援してくださっていることは、児童のために役立っていると思う。(学習面、人との接し方等)(保護者アンケート) ・ボランティアの方と一緒に学習するのが楽しい。(児童アンケート)	保護者：92％ 教職員：96％ 教職員：97％ 保護者：95％ 児童：88％	A A A	保護者：90％ 教職員：96％ 教職員：96％ 保護者：94％ 児童：88％	・行事予定表の配付やホームページへの掲載が予定期日よりも遅れてしまったことがあった。多くの目でチェックして声を掛け合っている必要がある。 ・各担任、担当が見通しをもちながら計画を立てていた。それぞれの経験を引き継げるような記録を残しておくことが大切である。 ・ボランティアの方に感謝の気持ちが高えられるよう、学級での指導をはかるとともに、来校予定を放送するなどして児童の意識を高めていく。 学校における教育課題を的確に捉え前向きに取り組んでいる姿勢は評価に値し、家庭や地域からは教職員への信頼が増している。一方で、教職員が頑張らずにいることもあるので、教職員の負担にならないように学校の無理のない範囲で効率化していいのではないだろうか。